

伊藤友治郎編・日南公司南洋調査部刊

南洋を語るとき、古にまだしの頃

民の立場で南洋を紹介し、人材を育て、

彼らに情報・支援を惜しまなかつた人の人物が甦る

⑤復刻版
南洋年鑑 全4巻

すいせん 吉木澄夫

酒原林直人 倉沢愛子

後藤乾一 早瀬晋三

预定価二二〇,〇〇〇円(十種)

龍溪書舎

刊行の辞

本書は、南洋調査協会を起した一民間人伊藤友治郎の著になる「南洋に関する総合情報誌」の性格を帶び、大正五年十月一日より、同九年十一月二十九日の間に四回刊行された。

時あたかも歐州戦乱により、日本は未曾有の好景気を迎えていた。同時に未知なる「南洋」へ急速に関心が高まり、渡航する動きが活発化していた。しかしながら当時の日本人には、彼の地の情報に乏しく、その多くは漠然とした「南洋」への憧れだけで、限られた情報のみで渡航した例も多かったようだ。起業には幾多の危険が伴い、成功例は極めて希であった。

正確な情報が何より要望されていたこの時代、その期待に応えて刊行された本書は、「データを基礎に幅広く未知の「南洋」を紹介している。それは一個人が果たした希有な我国最初の「南洋総合年鑑」であった。

平成23年10月



伊藤友治郎と「南洋」

中部大学国際関係学部教授 青木澄夫

龍溪書舎

日本と南洋の交流史の中で、忘れ去られた人物に伊藤友治郎がいる。今では東京神田のカレー店にインドネシアのスマトラカレーの味を伝授した人として知られているにすぎないが、伊藤は明治の末に満州、朝鮮、シンガポールで日本語新聞を発行し、また昭和の初めまで民の立場から南洋を紹介して、南洋向けの人材育成に尽くした人物だった。伊藤は、一八七二（明治五）年、信州伊那谷の高遠長藤村に生まれた。地元で小学校教育を受けた後、横浜を中心にして新聞記者を務め、また、壯士として労働運動や廃娼運動に関わった。そのため警察当局ににらまれ、官吏侮辱罪など前科12犯となっている。この間、演歌師の添田啞蝉坊や社会主義者の片山潜等と交流し、後に神戸を中心として女性や孤児を救済した著名な社会事業家城ノブと一九〇三年に結婚した。伊藤が海外に出国したため結婚生活は短かたが、長藤村で誕生した長男マレー・オブ・マザーズの中でも父について触れている。

一九〇九年にシンガポールに渡り、鉄筆版の日刊日本語新聞『星嘉坡日報』を創刊する。同紙は〇八年に福

田天心が創刊した日本語新聞『南洋新報』に次ぐものだった。当時のシンガポール日本人社会は、からゆきさんに寄生してきた守旧派と新たに事業を興した日本人グループとの間に軋轢があり、それぞれ『南洋新報』と『星嘉坡日報』に論陣を張り対立が激化した。伊藤は護謨園経営にのりだした文学者長田秋濤とともに改革派として筆を奮ったが、大逆事件で処刑された大石誠之助の押収文書の中に妻ミスヨの名前があったことから、十一年二月に要視察人甲号に、ミスヨは乙号に編入された。これ以後、内務省、外務省などから執拗な監視を受け、また過激な論調からシンガポールの邦人社会に敵を作り、十二年一月にシンガポールを去った。この後満州に渡った伊藤は古江ミスヨと結婚し、『長春新報』を主宰する。伊藤はミスヨの旧姓古江を用い、その筆は南滿州鉄道会社（満鉄）の経営を厳しく攻撃した。そのため一九〇八年に関東都督府から三年間の退去命令を受け、直ちに朝鮮の清津に渡り、『咸北日報』を創刊した。しかし、清津でも危険人物として三年間の在留禁止命令を受けて帰国し、古江香夢の名前で『清津港』を刊行した。

一九一四年に、東京で開催された大正博覧会を機に、シンガポール、マレー、蘭領東印度などの風物や日本の経済活動を紹介した大判写真集『南洋群島写真画帖』を刊行した。しかし、日本国内での移動には警察の尾行がつきまとつたため、時の総理大臣大隈重信に陳情書を提出し、身の潔白を訴えている。

一九一六年に『南洋年鑑附興信録』、十八年に『南洋写真画帖』と『第二回南洋年鑑興信録附南洋要覽』、十九年に『第三回南洋年鑑興信録附南洋要覽』、二十一年に『南洋年鑑第四回』を刊行した。これら年鑑の興信録に記された現地日本人の経済活動の状況は、日本人の南洋進出を知る上で欠かせない資料となっている。

二一年、東京京橋に南洋物産館を設立した。二三年には夜間制の南洋専修学校を創立し、以降十二年間に五

三〇名の卒業生を輩出して、内一八一名を渡航就職させた。二十四年、内田良平の支援のもと同校の母体となる南洋拓殖協会を設立するも、関東大震災で南洋物産館を失い、それが縁で神田神保町の食堂共榮堂にスマトラカレーの味を伝授した。

南アメリカに向けた政府の移民政策を批判し、南洋移民の意見書を南洋會議に向かって提言するとともに、南洋専修学校からは『南洋旅行案内』を刊行し、南洋の情報を伝えた。『南洋年鑑』の続編（一九三六～三七）刊行も企画したが、既に同名の年鑑が台湾總督府から刊行されており、実現には至らなかった。農村の疲弊を憂いて農本文化協会を設立し、『村を此の破滅から救へ』等の小冊子も刊行した。

一九三二年に結婚した三番目の妻千代子と、四一年に故郷の長藤村に帰り、洋館を建て農本塾とし、晴耕雨読の生活を送った。反戦思想・反骨精神を貫き、幸徳秋水、堺利彦、大杉栄などの蔵書を押収されたり、警察に拘留されたりしたこともある。この間、添田啞蝉坊の長男で文芸評論家の添田知道と親交を深めた。戦後は『この敗戦の危機に面して』などの小冊子を刊行し、四七年に戦後初の長野県議会議員選挙に75歳で立候補をしたが最下位で落選した。一九五三年十二月、「お経不要、戒名不要、坊さん不要、線香不要」を千代子に課し、自ら作成した天道經を唱えさせて、八十一歳の生涯を故郷で閉じた。

第一編 海峽植民地	第一章 政治
第二章 面積及人口	第二章 面積及人口
第三章 出產及死亡	第三章 政治
第四章 教育	第四章 面積及人口
第五章 裁判及犯罪	第五章 財政
第六章 工業	第六章 商業
第七章 国防及産業	第七章 船舶及水運
第八章 財政	第八章 交通
第九章 工業	第九章 市政其他
第十章 貨幣及信用度	第十章 新嘉坡の水道
第十一章 量衡对照	第十一章 航運
第十二章 貨幣及信用度	第十二章 市政其他
第十三章 船舶及水運	第十三章 新嘉坡の水道
第十四章 量衡对照	第十四章 航運
第十五章 屬地ラブアン	第十五章 貨幣及信用度
第十六章 ジョホール王	第十六章 ジョホール王
島	島
第二編 馬來半島連邦洲	第二編 馬來半島連邦洲
第一章 政策	第一章 政策
第二章 面積及人口	第二章 面積及人口
第三章 財政	第三章 商業
第四章 教育及警察	第四章 交通
第五章 産業	第五章 産業
第六章 商業	第六章 交通
第七章 交通	第七章 交通
第三編 蘭領東印度	第三編 蘭領東印度
第一章 面積、人口、及氣候	第一章 面積、人口、及氣候
第二章 政策	第二章 政策
第三章 商業	第三章 商業
第四章 交通	第四章 交通
第五節 護謨	第五節 護謨
第六章 産業	第六章 産業
第七章 銀行	第七章 銀行
第一節 米穀	第一節 米穀
第二節 咖啡及茶	第二節 咖啡及茶
第三節 砂糖	第三節 砂糖
第四節 煙草	第四節 煙草
第五節 樹脂	第五節 樹脂
第六節 香料	第六節 香料
第七節 貨幣	第七節 貨幣
第八節 植物性油類	第八節 植物性油類
第九節 織維類	第九節 織維類
第十節 藥料、染料、鞣料	第十節 藥料、染料、鞣料
第十一節 木材	第十一節 木材
第十二節 牧畜業	第十二節 牧畜業
第十三節 鉱物	第十三節 鉱物
第一章 在新嘉坡各國銀行	第一編 附興信録
第二章 在彼南各國銀行	第二章 第一章
第三章 在スマトラ島各國銀行	第三章 第二章
第四章 在スマトラ島各國銀行	第四章 第三章
第五章 在留日本人名鑑	第五章 第四章
第六章 在留日本人名鑑	第六章 第五章
第七章 南洋直取引希望者	第七章 第六章
第八章 南洋諸港湾船舶貨	第八章 第七章
銀一覽	第九抄 各種比較表

本書の特色

1. 南洋調査会を起した伊藤友治郎著の「南洋」に関する我国最初のデータを基礎にした年鑑。「南洋」へ憧憬の眼で日本人を誘う紀行文・皮想な観察記の横行する当時にあって、まず基礎知識を身につけ、更に南進勇飛の針路を示めそうとする意図を持っていた。
2. いまだ官による関係資料も未刊の時代、「南洋」と呼ばれた、日本人にとって未知なる豊かな世界を伝えた重要な参考資料だった。
3. 広大な地域「南洋」を詳細且つ広汎に、地勢・風土・行政・交通・産業・人種・宗教・人口・金融等々を記述し、彼地の全体像を鳥瞰できるようにした。
4. 興信録・要覧を加え、各種名簿・信用名鑑等により日本人の経済活動を支える基礎資料の性格を有していた。

解題 青木 澄夫（中部大学国際関係学部教授）

すいせん 河原林直人（名古屋学院大学経済学部准教授）

（50音順）
（敬称略） 倉沢 愛子（慶應義塾大学経済学部教授）

後藤 乾一（早稲田大学アジア太平洋研究センター教授）

早瀬 晋三（大阪市立大学文学部教授）

体裁 A5判・上製・総2,250頁

製作部数 30部

揃本価格 120,000円(+税) ISBN978-4-8447-0489-8

<好評既刊>

■カタログ

第1期 比律賓情報 全21巻

創刊号～90号 総8,000頁 揃本価格460,000円
付・比律賓協会会務報告 ISBN978-4-8447-0488-1

第2期 大亞細亞主義 全26巻

創刊号～108号 総10,200頁 揃本価格650,000円 ISBN978-4-8447-0487-4

第3期 亞細亞公論・大東公論 全3巻

1巻1号～2巻1号・大東公論創刊号 総1,500頁 揃本価格100,000円
ISBN978-4-8447-0492-8

第4期 南方開発金庫調査資料 全14巻（予定）

[近刊] 約6,200頁 揃本価格350,000円（予定） ISBN978-4-8447-0227-6



龍溪書舎

〒179-0085 東京都練馬区早宮2-2-17
TEL 03(5920)5222 FAX 03(5920)5227
URL:<http://www.ryuukei.com>
Mail:info@ryuukei.com